

同志社で学んだ人たち

講演	原 誠〔はら・まこと〕
講師紹介	同志社大学キリスト教文化センター所長 同志社大学神学部教授
研究テーマ	日本とアジアのプロテスタント教会の歴史

はじめに

「建学の精神とキリスト教」の授業を始めますが、本日の私の授業は、「同志社スピリット・ウィーク」の一環として、通常の授業であると同時に、同志社にかかわるさまざまな事柄について知っていただきたい。そのためにこの授業を履修していない学生、そしてこのことに関心を持つ市民の方々もこの授業に参加しておられます。そのことを予めお伝えいたします。

「同志社スピリット・ウィーク」では、この授業のみならず、さまざまなプログラムが今週、今出川校地と京田辺校地で行われています。

本日は公開講演授業になりますので、「同志社で学んだ人たち」というタイトルがついております。何人かの名前を挙げてみます。小崎弘道・海老名弾正・安部磯雄・柏木義円・留岡幸助。すべての人の名前を知っていたという人がいたら手を挙げてみてください。おそらくあまり知られていないようですので、今からご紹介します。まさに同志社が生んだ非常に重要な人々、日本の近代史のなかでも、重要な人々だということを知っていただきたい。そして興味と関心をもっていただいたら、ぜひ深く調べてみてほしいと思います。

同志社創立時代の学生たち

小崎弘道は、熊本バンドの出身者で、新島崑と第二代会社社長となった人です。熊本の出身で、直接新島から教えを受けていました。小崎弘道だけでなく、本日ご紹介する五人は全員新島から直接教えを受けた人たちです。海老名弾正という人物は、同志社が旧制の大学に昇格するときに、非常に大きな貢献をした日本を代表する思想家の一人です。海老名弾正も熊本出身で、熊本バンドの一員です。安部磯雄・柏木義円・留岡幸助、彼らは同志社の卒業生ですが、熊本の出身者ではありません。しかし社会のなかで非常に大きな働きをした人々です。安部磯雄というのは社会思想家、社会主義運動、キリスト教と社会主義という運動のパイオニアの一人です。のちに、最終的には早稲田大学の教授となり、早稲田大学野球部の初代部長で、東京ドームにあります野球殿堂に名前が載っております。生涯、学者でありつつ社会主義運動をずっと続けた人です。柏木義円は、生涯のほとんどを群馬県の安中という草深いところで、牧師として、また当時の社会ジャーナリストとして激しい社会的な批判を繰り返していました。彼が出していた新聞、雑誌の多くは、発禁処分となりながら、キリスト教の信仰をもつということはどういうことか、ということを発表しつづけた牧師です。そして留岡幸助は、日本の社会福祉のパイオニアです。この三人は熊本出身ではありませんが、いわば同志社の第一世代として日本の近代社会のなかで大きな働きをした人々であったのです。同志社が、キリスト教を德育の基本とする、キリスト教に基づいた学校であるということは、今までもお話をしてきました。また、同志社は、キリスト教をただ広めるためだけの学校ではないということも、何回かお話ししたことを覚えておきましょう。

同志社の歴史は、同志社英学校から始まっております。基礎的な教養も、すべて英語で授業をし、そしてその後、続いて今の大学院にあたる予科がつくられました。この予科というのが、同志社神学校だったので。この神学校は後に専攻が分かれていきます。神学と倫理学の専攻に分かれていく。そして倫理学の専攻がさらに分かれていき、現在の社会福祉につながっていく。同志社のキリスト教は、非常に強く社会的関心をもっています。他のキリスト教大学と決定的に違うのは、この社会的関心の強さだと思います。社会のなかでキリスト教はどういう意味をもつのか、という関心をもつこと、これが同志社の特質だったので。日本人が、宗教に関して正しい理解をすることは難しい。宗教に対して、危ない、怖い、取り込まれてしまうぞ、というようなネガティブな認識があります。そういう宗教活動があることも、私たちはよく知っています。だからといって、宗教は全部アウトなのかということ、そうではありません。キリスト教には、人間を活かし、動かし、何かを作り始めていくような力があるということは、歴史的に事実として残っています。本日、ご紹介する人物たちもそうであるという事実を、皆さん一人ひとりが宗教を考えるヒントにしていだけたら良いと思うのです。

小崎弘道

小崎弘道は、熊本の出身で、同志社を卒業したあと東京に行き、東京の霊南坂教会という日本を代表する教会を創立し、東京基督教青年会 YMC A (Young Men's Christian Association) も創立します。YMC A を東京基督教青年会と訳したのは小崎です。彼は抜群の学識をもっていた人なので、Yong Men これを「青年」と訳しました。日本古来には無い言葉で、明治になって初めて翻訳された今の言葉がある。たとえば宗教・社会・哲学・倫理という言葉も、もともと日本になかった言葉です。明治になって西洋文明、西洋思想と触れ合って翻訳されたという言葉がたくさんありますが、そのなかの一つに「青年」もありました。現在の YMC A は、キャンプや、スポーツ教室、宿泊施設などで知られているかもしれませんが、本来は、知識を求める青年たちのサロンであります。明治の初期に西洋文明はどんなものなのか、学んだ人たちが集まり、お互いに情報交換するという、一種のサロンだったので。そこから始まって『六合雑誌』が創刊されました。「ろくごう」ではありません、「りくごう」と読みます。六合には、東西南北で四方、天と地で二方、でこれを合わせて全世界という意味があります。明治の初期、中期の最も啓発的な西洋文明・科学・思想などを紹介する雑誌でした。彼は自分のポケットマネーで欧米のさまざまな雑誌類を定期購読し、それを翻訳し、紹介し、六合雑誌に掲載していく、そういう人でした。これは明治時代の日本の知識、西洋文明の知識に飢えていた人々に非常に大きな衝撃を与えることになりました。このように小崎弘道は、キリスト教の牧師であって、文化活動、ジャーナリスト、思想に非常に大きな貢献をした人でありました。

また、「警醒社」を興し、『東京毎週新報』も創刊し、キリスト教文書伝道に力を注ぎました。小崎弘道は、新島崑の遺言に立ちあった一人です。小崎自身は、第二代会社社長になりたいと思っていたわけではなかったのですが、請われて新島崑と、京都に移り、第二代会社社長となりました。アメリカン・ボードからの独立を推進した人でもあります。新島は、アメリカの宣教師の身分で日本に派遣されてきました。宣教師仲間から見れば、新島は後輩であたり同僚であたりして、白人のアメリカ人の宣教師の仲間と見られました。そして作られた学校が同志社英学校です。そこで育てられた多くの学生たちは、同志社はアメリカのお金で建てられたけれど、日本人がつくった学校だと思っている。学校の経営のためにはアメリカからのお金が必要である。しかし、日本人たちからすると、これは、日本の学校であるということで、宣教師たちと日本人の教師、学生たちはいつも喧嘩していました。新島の最晩年の遺書の中でも、自分が死んだ後、混乱が起こらないことを願うと、そのことについて心配をしている文書があります。しかし、大混乱になりました。それが原因で、宣教師団との関係が切れてしまい、その時の渦中にいたのが小崎でありました。別の言い方をすると、同志社が、アメリカン・ボードの植民地のようになることを嫌っていたというのが小崎の立場でありました。

そして彼は同志社社長を辞めた後、再び東京に戻って一生を東京で働きました。聖書の高等批評学も紹介しました。聖書を読んでみると、理解しがたい奇跡が起こる話が出てきます。イエスが手を置いたら病気が治った。死人がよみがえった。信じがたい話がたくさん出てきます。しかし、そういうものだけかと言うとそうではない。聖書もまた人の手によって書かれたものであって、書いた人の時代状況がある。どういう立場、どういう考え方があってこういふ文章ができたのだらう、という聖書の研究が起ってきます。特に、ドイツの学問のなかで、歴史哲学の方法論が進展していました。聖書は神の言葉である。しかし、それは人間が書いたものだ。こういう学問的な立場があるんだということを日本に紹介した最初の人物です。これが小崎弘道です。

海老名弾正

次に、海老名弾正についてお話しします。恵泉女学園大学吉 馴 明子 名誉教授が書かれた『海老名弾正の政治思想』という本があります。私は、この吉馴先生と同じ歳なのですが、彼女は東京大学法学部の学生とき、博士論文でこの『海老名弾正の政治思想』を書き、法学博士号を授与されました。海老名弾正は、宗教家、牧師ですが、彼の思想は、法学部の思想にも影響を与えた。それぐらいの人物であったということになります。同志社を卒業した後、群馬の安中教会で牧師をしていたときに、同じ教会の牧師である柏木義円に非常に深い影響を与えます。その後、前橋・弓町本郷・熊本・神戸各教会の牧師を歴任して、1920年同志社総長となりました。彼は、在職中に旧制英学校から同志社大学になるために非常に大きな貢献を果たした。皆さん方は今、同志社大学で学んでおられるのは当たり前と思うかもしれませんが、専門学校以前の同志社英学校が大学に昇格することは、勝手にできることではなく、当時で言えば文部省、今でいうと文部科学省から非常に厳しい審査がありました。土地が何平米あるか。校舎がちゃんと整っているか。図書館の中には、どのような本を用意するのか。各学部に分かたらしい本が何冊以上必要か。何よりも大学の教授にふさわしい人材が何人いるのかというようなことが全部審査されます。それをクリアして、それ以前に何よりも基金としてのお金があるか。大学は商売ではありませんから、大学が運営されていくためにふさわしい基金をもっているかということまで全部審査をされて、全部の項目をクリアしてやっと大学になれる。審査に通るため、とても大きな力を発揮したのが海老名弾正でありました。

彼は吉野作造や中 島 重に影響を与えました。吉野作造という名前、高校時代に日本史を勉強された方々は、高校の教科書に載っているのを目にされたことがあると思います。民本主義の思想家です。民本主義というのは、Democracyの訳語です。今は民主主義と言っています。民主主義は、古来、日本に昔からあったわけではないのです。民本主義を打ち立て、体系化して紹介したのが吉野作造なのです。吉野作造に決定的に影響を与えたのが海老名弾正です。海老名弾正が、弓町本郷教会という教会の牧師をしていたころの話です。通常、日曜日の朝は、教会では礼拝を行います。牧師がそこで説教をします。海老名弾正が説教しているとき、そんなに大きくはない教会の礼拝堂が満員になるのです。外から窓に首を突っ込んで、説教だけ聞きたい。海老名の説教が聞きたいと東京大学の学生が鈴なりになって来ていました。これは、皆さん方のもつ宗教、キリスト教とは何かという疑問と重なるところがあるのかもしれない。海老名の語る説教、キリスト教、聖書、そこからくる人間理解、世界観というものが、当時の学生に非常に大きな影響を与えて、刺激的だったわけですから、そのようななかで、吉野作造は、東京大学法学部の学生でありながら、海老名弾正の思想の影響を受け、憲法学の教授となり、民本主義を打ち立てたのです。だから、吉馴先生は、吉野作

造のルーツである海老名弾正を本に書いて紹介したというわけです。

中島重というのは誰かと言うと、この同志社が専門学校令による同志社大学、そして旧帝国大学令による大学になるときの重要な法学部のキーパーソンです。中島重も、吉野作造と、ほぼ同期で、海老名弾正の説教を東大の学生時代に聞いていた人なのです。彼の思想は、少し皆さん方にとっては難しいかもしれませんが、社会全体が、そして彼ら自身が、武士階級の人間として儒教の思想を叩きこまれていたときに、キリスト教という新しい西洋の教え、宗教、思想に触れ合ってしまったと思います。簡単に「キリスト教って、良いですね。過去の儒教は全部捨てます。武士道は、もう古臭いです」となるわけがありません。「キリスト教なんか、いらない」と言ったらそれまでです。しかし、キリスト教には、何か学ぶことがある。何か、これには不思議な力がある。それが何かを知りたい。ということになれば、今までの自分の思想、つまり儒教の思想とキリスト教の思想との間で葛藤が起こります。今の新しい言い方をすると、文化摩擦。AとBがぶつかったとき、「Bはやばい」と言って叩き潰してしまうということがある。しかし、逆に攻め込まれてしまってAがいなくなるといふこともあります。いやいやながらAを認めざるを得ない。いや、これはなかなか良いではないか、という逆の場合もあります。たとえば、日本古来の袴と草履がよければ、今、私たちは和服を着ているはずですが、合理性のことを含めスプーンもフォークも使うけれども、箸も捨ててはいないという状態です。さまざまな文化交渉、文化摩擦を起こしながら新しいものを生み出していくわけです。そんななかで、本質的には儒教の文化で育てられてきた海老名がキリスト教という新しい思想と向き合ってしまったか。そのことについて誠実に考え、苦しんだことで、結果的には先ほど言った吉野作造や中島重にも影響を与えたというわけです。彼の神学思想の特徴は、人間は、潜在的にキリスト教の価値観のような宗教的意識が備わっている。神学思想の特徴、万人に普遍的な宗教的意識を究極的に実現させたものをキリスト教とし、儒教・神道との連続性を説き、キリストを人間の宗教意識の最も発達した最高の人格者としたのです。日本人の胃袋の中にキリスト教をおさめていくには、どうしたらいいか、という考え方です。

民本主義をわかりやすく説明します。日本人の儒教の考え方の単位は家だと思えます。家には家長がいます。武士階級の場合、当然のことながらそこには藩があって、藩主がいます。その上に将軍がいる。その秩序が、がっちり固まっている。ですから、家長に対しては、息子、娘、嫁も皆従属して従うわけです。藩主は将軍に対して忠誠を誓うという構造。なぜ将軍が重んぜられなければいけないかという、将軍は単なるトップである以上に天の教えに従って政治を行っているから、下の者どももちゃんとすることを聞けよ、という天と将軍との関係です。為政者との関係。これが儒教の価値構造でありました。大体おわかりだと思います。キリスト教の場合は、どういう思想になるのか。

明治の初期にキリスト教徒になった人は、皆、悩みました。そのなかで、海老名が、どう考えたかという、天がキリスト教というGODというように考えれば、キリスト教が自分のなかで腑に落ちると考えたわけです。キリスト教でいうイエス・キリストというのは神の子。GODがつくったものだから、イエス・キリストはその下だ。人間の最高のモデルだ。イエスのような生き方をすればいい。イエスの教えに従って生きていけばいいというのが、海老名の考え方でした。そうすることによって、自分の差別もなく皆、貧乏人も金持ちも武士も平民もみんな一人ひとり天皇の子ども、あるいは神の子と考えられて、一人ひとりの個人としての尊厳がある。これが先ほど言った民本主義という思想につながっていくわけです。ですから、日本は、政治や憲法と宗教は関係ない、そういう認識の方が多いのですが、本当はそうではない。宗教がもつ世界理解とか人間理解というのがあることは、知っておられてよいことです。この授業にも経済学部の方々が出席されていると思います。経済学部の経済とは何か知っていますか。経済学部が金儲けの学部だと思ったら大間違いです。経世済民という言葉があるのです。これ漢字を見たらわかりますね。民が豊かに生活できるようなこの世の秩序。物が豊かに、バランスよく生産され、それが問題なくスムーズに流通し、そして燃やさくことであるべき形で消費されるという、この仕組み、メカニズムが経済で、金儲けのための学問ではない。もちろん、商学もその仕組みが何であるかというのを専門的に学問として学ぶわけで、こちらも金儲けの学部だと思ったら大間違いです。海老名は憲法学の考え方のなかから、キリスト教の人間理解というようなものを集中して考えた結果、それを民本主義という思想につなげていったのです。非常にスケールの大きい人物です。

安部磯雄

安部磯雄についてお話しします。キリスト教社会主義者、教育者。「日本社会主義の父」「キリスト教徒としての社会主義者のうち最も著名、かつ優れた思想家」と言われた人です。同志社英学校を卒業後、岡山教会の牧師となり、渡米してキリスト教社会主義の影響を受けて戻ってきて、同志社で教鞭をとり、自ら社会主義を選択します。マルクスに負うところがあるのは事実ですが、社会主義を精神的方面からみて、人類を中心として宗教と社会主義とが自分のなかで渾然と一体化しているというような話を先ほどの『六合雑誌』に多数投稿します。日露戦争時に数少ない「非戦論」を展開します。唯物論的な社会主義が一線を描いた、人間的な社会主義者というわけです。先ほど言いましたように、早稲田大学野球部の初代部長として、野球殿堂に名前が載っている人です。もう少しプロフィールを教えてください。彼は九州の福岡の出身です。もともと福岡の黒田藩の藩士の息子として育ちます。自分の将来のことを考えたときに、海軍の軍人になりたいという夢をもちました。海軍の軍人になるためには当然英語が話せなければ、海外に出て行くことはできない。英語を勉強するには、どこに行ったらいいかと考えて入学してきました。入ってきてびっくりです。もしかしら皆さん方もそうかもしれません。同志社はキリスト教教育の学校だった。皆さん方、約100年前の時代背景とのギャップを考えてみてください。現在、日本の社会のなかで、キリスト教のことを「そんな宗教やめとけ」というような反応は多分、ないと思います。つまり、現在キリスト教と言ったときの印象は、プラスではないかもしれませんが、マイナスでもなく、まずまずなのではないかと思いますが、いかがでしょう。100年前、キリスト教は耶穌教と呼ばれ、徳川時代のキリスト教の弾圧がどうであったかということについては、ご存じの方も多いと思います。キリスト教というのはマイナスのイメージしかありませんでした。250年間鎖国を続け、宗門改とか、寺請制度でありますとか、そのような非常に厳しい共同体のなかで、キリスト教を弾圧し、キリシタンは邪宗門であると非常に強く教えこまれていた時代に、入学してきてびっくりしたはずですが、そういう誤解と偏見にもかかわらず、安部磯雄は新島と会うわけです。新島の人格に触れていきます。彼は、「同志社は、まったくデモクラティックであった」と回顧しています。デモクラティック。デモクラシー。教師と学生、学生同士がそれぞれの名前を「さん」で呼び、教師も、新島も学生を呼び捨てにするわけではなく、たとえば、新島は「おい、原」なんて呼ばず、「原さん」と呼ぶ。もう少し余談のエピソードを紹介します。若王子山頂にある同志社の共同墓地に入って、正面のところに新島の墓がありますが、その墓地に入るとすぐ右側の隅っこに、とても小さな墓石があります。その墓石は何かと言うと、五平という同志社の用務員さんの墓石です。当時の同志社の学生は、大体気が荒い。そのころ、女性はいませんでした。男子学生ばかりで、九州人が多くいたということもあり、気が荒かった。そんななかで、同志社の学生が五平さんに対して「おい五平、おい五平」と言って呼び捨てで呼んで、からかったりもしていたのです。五平はある日、学生たちに対して猛烈に反発します。「あんたたちに五平と呼びつけにされるわけはない。新島先生も俺のことを五平さんと言ってくれるのに」と。そういうのが初期の同志社の雰囲気でした。

また、ラーネッドという宣教師が、来ていました。同時にラーネッドは、日本で最初に体系的な経済学を教えた人です。彼は、アメリカの大学で経済学を主に勉強し、学位をとって、大学院で神学を学び、宣教師になって日本にやって来たのです。アメリカで学んでいたときの経済学の理論がすっかり身につけていたので、彼は経済学を教えることができた。それが日本で最初の体系的な経済学だったと言われてます。経済学というのは社会科学です。ですから、好き嫌い、良い悪いではなく、客観的にそれを読み、分析し、対象として見ていく。客観的に見るということが、社会科学の方法論です。そういうなかで、日本の社会のメカニズムは何であるか。経世済民に役に立っているかという視点から教えていました。

安部磯雄は同志社に、誤解と偏見ももっていたにもかかわらず、新島から人格的な決定的な影響を受け、そしてラーネッドから経済学を学んで、最終的には洗礼を受け、クリスチャンとなりました。彼は、こう書いています。「御人は文学者、政治家、実業家として成功する前に、まず人間として成功しなければならない」。これがクリスチャンになる動機でありました。そして同志社については「まったくデモクラティックであった」。先ほど言ったように、「同志社で学んだキリスト教は、倫理的・科学的・社会的・政治的色彩の強いものであった」と。安部の見解によりますと、「キリスト教は、個人をも社会をも救済する旗印を標榜している。明治維新は政治的な維新であった。精神的な維新が必要であり、精神的維新はキリスト教によってなされるべきである。第二の維新が必要だ」というわけです。彼は、卒業して岡山の教会の牧師をし、そしてアメリカに渡ってハートフォード神学校という大学院で勉強しますが、皆さん方でも高等学校の時代に交換留学などで海外生活をされた方々がおられるかもしれませんが、今後アメリカや海外の一年間交換留学するというようなことになるところかもしれませんし、海外の大学院で勉強するということがあるかもしれません。彼の場合は、アメリカで勉強し始めていたときに、アメリカの社会とそのなかでのキリスト教の教会のありようを見ていくことになりました。

アメリカで安部磯雄が学んだ時代は、明治時代の中中期から末期です。その時代、アメリカはすでに産業社会となっていました。産業社会・資本主義社会になっているとは、どういうことかと言いますと、大規模な工場ができ、大量生産、大量の消費が始まっていき、その作ったものを売るために、内外にマーケットを確保するということです。そこでアメリカで起こっていることは、儲ければ儲かるだけ資本を投下して、企業、工場をつくり、そこで雇われて働く工場労働者が生まれる。工場労働者になって、日給で働く。もし、病気に罹ったり、怪我をしたら、補償金を支給され、辞めさせられました。景気によっては、今の日本もそうですが、大量雇用するけれども、不景気になったらすぐに首を切られるという、これが資本主義、あるいは産業社会の現状です。彼は、アメリカに留学していたときに、アメリカの産業社会がさまざまな抱えている矛盾が、人間にどういった影響を与えているかということを目の当たりにするわけです。そういう時代に、キリスト教の教会はどういうことをしていたかという、ミールサービスです。日本で言うと炊き出しです。日本では、釜ヶ崎などで行われています。もちろんキリスト教会だけではなく、炊き出しはずっと長い間行われています。アメリカの教会でも同じようなことをやっていて、教会の信徒から献金などで、お金を集め、パンとミルクなどの飲み物を購入し、無償で配る。いろいろな教会がいろいろな活動をしているのを見るわけです。これは、慈善活動です。しかし、その慈善活動は、もっと大きな社会構造、経済構造、産業構造の結果、生み出されたものなのです。しかし、根本的な問題を解決しなければ状況は変わらないということくらい、多分皆さんもお分かりだと思います。一生懸命、慈善活動をする。それは良いことであるし、続けるべきだが、根本的な解決にはならない。それと同じことで、彼の場合は、世の中を良くするには、キリスト教という信仰をベースに、社会主義という運動を立てなければならぬということを考え、学んで日本に戻ってきます。キリスト教社会主義の影響を受けた、というわけです。そして自らキリスト教を信じるクリスチャンの一人として社会主義を選択したというわけです。

もう一つ、皆さん方、神学部の方ではないと、わかりにくいところがあるかもしれませんが、キリスト教のなかでも、いろいろな立場があるのです。聖書は神様が書いたものだから、絶対に嘘や間違いがなく、奇跡が起こるといえば起こる。それを信じるということが大切であるという非常に頑迷な保守的な立場で聖書を読むという考え方があります。また、聖書は神の言葉ではあるが、人間がその時代状況のなかで書いたものだと、小崎弘道が紹介したような歴史的に分析する立場もある。もう一つは、聖書のなかで奇跡物語なんていうものはよくわからないから、これは、全部ははずしてしまおう。しかし、はずしてしまっても黙殺はできない。聖書は良いことが書いてある。本当に正しい教えが書いてある。この教えを必要とするところだけ選んで、矛盾があるとか、奇跡とかわけが分からないところは省き、良い教えだけとりこもう、という立場のキリスト教もあるのです。非常に合理的にキリスト教を考える立場。信仰という部分を、なるべく抑えてしまう。そういうキリスト教もあるのです。海老名弾正も安部磯雄もそういう方向に流れていきます。ですから、教会のなかでのキリスト教とは、基だしく離れていましたけれども、キリスト教の信仰が、後に彼らの営みを助けていくことになりました。安部磯雄は、同志社を辞めて東京に行き、当初は東京専門学校、のちの早稲田大学の教授となって、そして社会思想を教え、社会民主主義の立場で政友会首として活躍することになりました。皆さんのなかで、文学部、法学部などで社会史、あるいは社会思想史について関心がある人は、安部磯雄などは面白い材料だろうと思います。今日、ヒントを差し上げましたから、さらに視野を広げて、自分で研究していただければよいと思います。

留岡幸助

留岡幸助について述べていきます。今年四月に、『大地の歌』という留岡幸助を描写した映画が上映されました。留岡幸助の役にあつたのが村上弘明さんという俳優でした。あまりにもハンサムすぎて少しイメージが違うという印象を私にもつたのですが、それはともかく、留岡幸助についての映画でした。彼は、岡山県の高梁という所の貧しい家庭に生まれて養子に出されます。養子に出されて、そこで侍の子どもと喧嘩になりました。子どもの喧嘩ですから、どっちが正しいとかいうのではないと思うのですが、侍の子どもに喧嘩で勝ってしまいました。家に戻ってから父親にもすごく激しくせつかんを受けるわけです。「何をしている、あの人はお侍さんの子どもだ。お侍さんの子どもに何ちゆうことする」と言われる。理不尽ですよ。身分の差別があって言いたいことも言えない。一方的に父親からも殴られまして、殴られる理由がわからない。「あいつが悪いのに」という不平等さ、この世の不条理というのが彼の原体験になるわけです。そんななかで、高梁から岡山に行くときに、金森通倫に出会いました。本来金森は、同志社第二代社長になるはずの人だったのですが、「あいつはダメだ」と新島から遺言で言われたために、彼は同志社を辞めて岡山の教会に赴任をして岡山県内のいろいろなところで、猛烈に活動して、たくさん教会をつくりました。そのエネルギーをフルに使っている金森のいる教会に行ったとき、説教のなかで、「神の前では侍の子ども商人の子ども一緒。キリスト教というのは平等だ。そういう人間観がある」ということを聞いて、留岡は教会に通うようになります。そして彼は、そののち21歳のとき、同志社に入ります。しかし、彼は、同志社に入学する以前には、きちんとした教育を受けていなかった。同志社は英学校からはじまった学校です。英語ができなければ勉強できないし、英語ができなければ神学も勉強できなかった。しかし、英語ができなくても神学、キリスト教を勉強したいという人たちの窓口ができました。この時は別科神学科という名前でした。邦語神学科と言ったときもありますが、日本語で神学を学び、牧師になるというコースがありましたので、彼はそこで勉強したのです。もちろん、新島をはじめ、いろいろな先生からの教育を受け、学びました。実際同志社の歴史のなかで、このコースから本当に優秀で、すばらしい牧師がたくさん出ているのです。留岡は、同志社を卒業したあと牧師となり、北海道に行きます。そして、北海道の空知集治監の教諭師となります。皆さん教諭師という職業をご存じですか。刑務所で囚人のための宗教活動をする、あるいは宗教の手ほどきをする人のことです。これはいろいろな役割がありますが、死刑判決を受けていつ執行されるかというなかで、自分の死を考えると、宗教的な営みにコミットする。あるいは、自分の死、死刑はいつ執行されるか。あるいは自分が強盗殺人で殺してしまった相手の命について思ひめぐらすということがあります。あるいは、有期の場合は、3年とか5年とかいった場合に、自分が犯した犯罪に宗教的な立場でお坊さんや神官や牧師さんが刑務所の中に行き、要望に応じてかかわるといった、そういう働きをいたします。彼は、その後アメリカに留学し、監獄学、犯罪についても深く学びました。

皆さん方にお聞きします。殺人を犯した。初犯である。裁判の結果、例えば、5年という判決を受けたとします。その5年という時間には、どういう意味があるか、考えたことがありますか。それは、罰としての5年でしょうか。あるいは、社会的規範から逸脱してしまって、共同社会生活が営めない、そういう性格、行動を起こしてしまったから、社会復帰のために必要なリトレーニングとしての5年でしょうか。従来、日本では罰だったのです。罰だから刑務所の中での、囚人の人格や衛生面、ありとあらゆる諸事情、今でいう人権というものも考えられもしないひどい時代でした。北海道の場合は、皆さん方おわかりにならないかもしれませんが、明治10年代の自由民権運動が高まっていた時代に、それに闘って参加した人が皆、政治犯として捕まって北海道に送られ、劣悪な自然環境の中で逃亡が出来ないように、足に鉄の鎖をつけられ、それを引きずりながら道路工事に従事させられていたという開拓作業、それは集治監の人たちによって、運営されていました。そういう劣悪な状況のなか、しかも強盗犯や殺人犯ではない政治犯までがそのような扱いを受けていたのです。このようなことから、刑務所中での待遇改善を進めていく必要が問われ、刑務所長の一人に、原胤昭という人がおりますが、彼が教諭師を配置することに決めたのです。これもキリスト教のネットワークです。

留岡は、北海道で教諭師をしながら、「刑務所とは何か。犯罪とは何か。」ということをやばなければならぬと強く感じました。なぜ、犯罪が起こるのか。ということをやアメリカで学び、そして日本に戻ってきて、東京の巣鴨と北海道に家庭学校をつくったのです。

当時は、円満で穏やかな両親のもと、家庭で豊かに育てられてきたら子どもに非行はおこらない。非行が生みだされるのはあたたかい家庭がないからだと考えられていました。敷地の中に家をつくり、畑をつくり、学校をつくり、そこで一緒に生活し、学び、働くという形態です。一つの家に仮の両親となる夫婦の元に、5、6人の少年と一緒に家族として暮らします。模擬家庭をつくり、そこで子どもたちと一緒に暮らすなか、畑で働いて教え、学校で学びという形で社会復帰を目指す、これが家庭学校です。

二宮尊徳という人をご存じですか。相模国栢山村（現在の神奈川県小田原市）出身で幕末から明治の初期にかけて活躍した農政家であり、報徳思想という道徳思想を説いた人です。非常に勤勉で、日本人の伝統的理解、宗教的理解者です。一生懸命、誰が見てようが見てまいが、汗水たらして勤勉努力して働く。それが日本人の特性だという、見方によれば日本の従来の儒教的な農村開発に近い思想と言ってもよいかも知れません。尊徳の思想は農村開発に非常に大きな力をもっていました。それに対し、キリスト教の教えは、わかりにくく民衆に伝わりにくい。ハイカラな西洋の宗教で日本人たちにはなじみがなく、敬遠されていた。留岡は、ここは日本であるから、日本人のそういう国民性や道徳観、価値観というものを大切にしないではいけないと思ったのです。だから家庭学校のなかでも、お父さんとお母さんと友だちと一緒に生きていく。そして働こうというようなことが大切だという尊徳の報徳思想をとり入れた。留岡は、日本の社会福祉の父と言われています。

同志社のスピリット

本日ご紹介した、同志社で学んだ人たちのことを一言で申し上げると、海外との文化摩擦を踏まえたうえで、キリスト教の日本化、キリスト教の土着化を試みた人たちであると私は考えています。キリスト教を日本人の伝統や価値観にどのように位置付けていこうかということを探したパイオニア的な人たちです。そんな彼らを同志社が、生み出したのです。別の言い方をすると、同志社だったからこそ、生み出された。哲学と文化、哲学と倫理、こういうことを本当に大切に考える、真正面から考えるのが同志社であって、それは新島のなかにそういうものがあり、そして同志社にそういう環境があり、そしてそれをまともに受け止めて自分の生き方のなかで実践していこうとした人たちが何人かいた。直接第一世代の新島の正眼に接した人たちです。同志社は、このようなすばらしい人物を育て、社会に影響を与えている。今同志社で学ぶ皆さんたちにも、この事実を興味と関心をもって、知っていただきたいです。そして、現在の同志社からも、世代を超えて語り継がれる人物が、是非でてきて欲しいと願っています。

2011年6月1日 同志社スピリット・ウィーク春学期
京田辺校地 「講演」記録